

『源氏物語』の語りと絵—夕霧の童殿上を起点として

青木慎一

## 目次

### 序

## 第一部 夕霧と童殿上—表現・儀礼・史的文脈から

### 第一章 『源氏物語』の童殿上

#### 第一節 童殿上の意味するもの

#### 第二節 夕霧と童殿上—「霽標」巻の「内裏、春宮の殿上」から—

#### 第三節 『源氏物語』の童殿上①—夕霧とその子どもたち—

#### 第四節 『源氏物語』の童殿上②—弁少将とその嫡男—

### 第二章 子どもをめぐる語りと和歌

#### 第一節 夕霧の「生ひ先」—成長をめぐる表現方法について—

#### 第二節 「松風」・「薄雲」巻における明石姫君—「生ひ先」に託された思惑—

#### 第三節 子どもの和歌—歌風と草子地への着目から—

### 第三章 結婚と儀礼—夕霧の婚儀を中心に

#### 第一節 夕霧の通過儀礼—雲居雁との結婚を中心に—

#### 第二節 『源氏物語』の結婚と儀礼—古注釈を手がかりに—

## 第二部 『源氏物語』の絵画的享受における物語解釈—夕霧そして光源氏の造型から

### 第一章 絵入りテキストにみる『源氏物語』享受（一）—夕霧物語の絵画化の再検討

#### 第一節 徳川・五島本「源氏物語絵巻」における夕霧—柏木～御法段の情景選択から—

#### 第二節 『源氏物語』の抄出本文—「伏見天皇宸翰源氏物語抜書」を始発として—

#### 第三節 「夕霧」巻の絵画化—小野の里と鹿の情景をめぐって—

### 第二章 絵入りテキストにみる『源氏物語』享受（二）—近世の絵画化を中心に

#### 第一節 「源氏物語絵巻」桐壺（幻の「源氏物語絵巻」）の絵画化

#### 第二節 スペンサー・コレクション蔵「奈良絵本源氏物語」の挿絵と物語解釈

#### 第三節 「鈴虫」巻における光源氏と女三宮—視覚化される関係性をめぐって—

### 付章

#### 第一節 幻の「源氏物語絵巻」本文考

結

既発表論文との関連

主要参考文献一覧

使用本文一覧

## 要約

本論では、『源氏物語』の語りと絵について夕霧の童殿上を起点として考察する。各章の内容については、以下の通り。

第一部では、童殿上を軸に物語の表現や通過儀礼、和歌などに着目し、子どもをめぐる物語の語りについて論じる。

第一章では、童殿上という史的制度が『源氏物語』で語られる意味を考える。童殿上の用例は、物語で十九例見られるが、それらは一定の役割を付されるのではなく、物語展開に応じて役割が変化しており、明らかな語り分けがなされている。夕霧についての「滯標」巻の例では、八歳で内裏と春宮へ同時に童殿上したと語られる。八歳での童殿上は、藤原道隆や藤原頼通の事例に相当する。つまり、夕霧の童殿上は摂関家の嫡男に比されるものであったと言える。さらに、内裏・春宮へ同時に童殿上したことは、『権記』における頼通の童殿上の記述と一致する。「滯標」巻における夕霧の童殿上の描写は簡略ではあるものの、内大臣光源氏の息、八歳という若さ、内裏と春宮への同時の童殿上という点で、当代きつての権勢家の長子・頼通の事例を髣髴させる。このような頼通を想起させる（少なくとも摂関家の子弟に類する）人物像の形成は、夕霧の元服にあたって源氏が「四位になしてん」と考えた四位の意味するところや叙爵後の急速な昇進などに多大な影響を与える。夕霧の童殿上は、頼通に通ずる将来性を格段に強く印象づける語りであったのである。そして、夕霧の子息についても立て続けに童殿上が語られる。童殿上が夕霧のみならず、次の世代に引き継がれ、家の繁栄を物語るあり方は、物語が夕霧家に意識的に童殿上を用いた証しと認められる。一方、夕霧の宿敵と言える弁少将とその嫡男も、童殿上の文脈と関係する。弁少将の童殿上は、物語展開に合わせて副次的に語られ、嫡男に至っては弁少将の回想や匂宮との親密なやり取りを関連付けて読むことで、ようやく殿上童と判明する。こうした異例の語りは、弁少将家の政治的な衰退を露呈させるものと位置付けられる。

第二章では、物語で用いられる「生ひ先」という言葉と子どもの歌に着目する。「生ひ先」の語は『源氏物語』において、夕霧や明石姫君に多く用いられる。夕霧の場合は、元服後六位からの出仕という先行きの見えない状況の「少女」巻と、申し分のない地位へと昇進した夕霧が女三宮の婿候補に上る「若菜上」巻で「生ひ先」が語られ、夕霧の境遇の差が端的に表される。明石姫君の場合には、本人の素質や行動などと結び付いて語られるものではなく、周囲の人物たちの会話や心内で想起される。周囲の人物に姫君の「生ひ先」が意識されることで、入内に向けての進展と姫君の成長が図られる。これは作中人物として個性を持たない段階から明石姫君の物語を推し進める語りだと位置付けられる。そして、物語で語られる子どもの和歌は、紫の上や明石姫君・大君・中君など、詠者が姫君であることが多い。これらの姫君に共通するのは実母と離れた境遇であり、いずれも自らの寄る辺なさを詠ずる。また、紫の上・明石姫君・大君の歌に付される草子地は、将来への展望

を示す。子どもの和歌を語ることは、子どもながらに歌が詠める教養の高さを表すことにつながり、不遇にある姫君の資質を保証し、物語に登場させる方法として注目されるのである。

第三章では、物語で語られる夕霧の通過儀礼を取り上げる。産養・元服・婚儀といった儀式自体は概略が語られるにとどまるものの、夕霧の物語においては夕霧中心の語りが開かれたり、成長した容姿が称えられたりするなど、光源氏を軸とする第一部の物語において、通過儀礼は夕霧の物語に視点を置いて語る契機をもたらす役割を担う。また、夕霧と雲居雁との結婚について古注釈の読みを参考にたどると、引歌の指摘が散見される。これは、和歌的表現を用いて当事者の心理を描く物語の語り起因するものだが、光源氏や薫の儀礼に准拠を求める古注の姿勢と比較すると、夕霧の話がほぼ物語の虚構の範囲内で象られることが明確になる。夕霧の通過儀礼への語りからは、准拠を意識させる造型とは一線を画した、夕霧の物語の独自の成り立ちが読み取れる。

第二部では描かれる夕霧像を中心に、『源氏物語』の絵画的享受における物語解釈を対象とする。

第一章では、絵入りテキストから夕霧の絵画化に関する作品を扱う。徳川美術館と五島美術館に分蔵される「源氏物語絵巻」には、物語で語られるのと同様かそれ以上に夕霧が印象深く登場する。絵巻に描かれる光源氏と夕霧の物語を読み解くと、それぞれの物語がほぼ連続して展開されることが指摘できる。光源氏の物語が女三宮の不義密通や紫の上の逝去などの悲哀に象られるのに対し、夕霧の物語は諧謔性を帯びながら明るい夫婦の情景を構成する。絵巻において、物語で語られる以上に夕霧の存在に重きが置かれる意図は、源氏の物語と夕霧の物語を積極的に対置させることにあり、夕霧をめぐる物語解釈の一面が見えてくる。また、国立歴史民俗博物館や石山寺、大応寺などに所蔵される「源氏物語抜書」については、『源氏物語』の本文研究の成果を参照し、詞書と写本の本文異同を検討する。さらに、場面選択には季節の流れが取り入れられ、中でも「夕霧」巻の秋の風景が十三世紀後半から十五世紀にかけ、盛んに用いられたことを確認する。「夕霧」巻の風景は、以降の源氏絵でもよく描かれており、抜書での愛好が後世の享受にも受け継がれた可能性が考えられる。ただし、源氏絵に描かれる「夕霧」巻の風景は、鹿を伴う秋の情景だけにとどまらない。「夕霧」巻の絵において、自然描写は小野の邸の外景として描かれ、夕霧や落葉宮といった人物とともに鑑賞される。中でも、恋の象徴である鹿と結びついて、扇をかざす姿で描かれる夕霧は「夕霧」巻を代表する一図であり、夕霧が情感あふれる貴公子として広く享受されたことがうかがえる。また、描く・描かないと意識的に描き分けられる鹿は場面の特定に影響するほど、絵師にとって重要なモチーフであることにも言及する。

第二章では、近世の絵画化の問題を中心に、絵入りテキストに言及する。「源氏物語絵巻桐壺」は、現在所在が確かめられる帚木や末摘花、葵、賢木と一連の絵巻であり、従来の源氏絵には見られない場面が多数描き起こされる。十五図が描かれる桐壺の絵については、

源氏絵の図様伝統や山本春正『絵入源氏物語』、石山寺蔵「四百画面源氏物語画帖」などと比較することで、更衣を喪った桐壺帝の悲しみや源氏と藤壺の対面という「もののまぎれ」に関わる文脈を絵画化する独自の傾向が明らかになる。さらに、物語本文を一切省筆せずに記した詞書は、説明なくしては読み解きにくい場面の絵画化をも可能にしており、長大な詞書と多数の絵の有機的な連関が、物語解釈を包含する豊かな表現世界を作り上げる点で、『源氏物語』享受の視座からも特筆すべき作品であると位置付けられる。スペンサー・コレクション蔵の五十四帖揃の「奈良絵本源氏物語」（以下、スペンサー本）は、物語本文を省筆せずに詞書とし、各巻ごとに複数の絵を配する。スペンサー本の詞書と絵はともに山本春正の『絵入源氏物語』を概ね踏襲するが、「絵合」巻や「少女」巻、宇治十帖などで『絵入源氏物語』とは異なる図様が描かれる。挿絵の相違からは、秋好中宮御前での絵合や夕霧の物語に積極的に意味を見出し、大君や浮舟といった縁起の良いとは言えない人物の絵画化を回避する姿勢が読み取れる。これらスペンサー本の絵画化の問題は物語解釈と深く関わることが指摘できる。そして、挿絵の描き方や詞書の字の特徴から、石川透氏が調査を行う「居初つな」という女性絵師がスペンサー本制作に携わったと考えられ、物語享受のみならず文化史の観点からも注目すべき作品と言える。源氏絵の図様伝統は、現存最古の徳川・五島本「源氏物語絵巻」から、狩野派・土佐派・住吉派などの豪華源氏絵、近世の絵入り版本、女訓書に至るまで脈々と享受される。そのうち、「鈴虫」巻については女三宮方の情景が描かれることが多い。これらの作品を場面ごとに分類して比較すると、同じ場面を絵画化しても構図や人物配置、景物などさまざまな部分で差異が認められる。特に、光源氏と女三宮が寄り添い、良好な夫婦関係を思わせる図様と、二人が距離を置き、視線も通わない夫婦仲の隔たりを感じさせる図様では、その印象が大きく異なると言える。このようなそれぞれの図様の差異に制作者の意図が反映されるが、それは時に物語解釈として表れてくることを述べる。

付章では、“幻の「源氏物語絵巻」”と仮称される一連の絵巻の詞書について本文研究の成果を用い、詞書と物語の写本の本文異同を比較する。絵巻本文に最も合致するのは肖柏本であるが、全ての部分で対応するわけではなく、別の本と符合したり、いずれの本文とも一致しない異同が見られたりすることからすれば、制作時の底本を特定するのは困難な状況にあると認められる。しかしながら、所在が判明する全巻で同様の傾向が看取できる結果からは、一連の絵巻制作にあたり同種の本文が用いられたとの想定が成り立つ。仮に分担制作であったとしても、元となる本文を提供した中心的グループのもとで、ある程度統一された意図によって制作された可能性がうかがえることを指摘する。